

われらの味方

2013年4月12日 ドン・フィン

列王記を通して読んでいて、エリシャとそのしもべがドタンで包囲された時の箇所まで来ました。シリアの王は馬と戦車の軍で街を取り囲みました。

若い者がエリシャに、「ああ、ご主人さま。どうしたらよいのでしょうか」と言った。すると彼は、「恐れるな。私たちとともにいる者は、彼らとともにいる者よりも多いのだから」と言った。

私たちとともにいる者！ここまできた時ふと目にとまりました。

次に何が来るかは分かっていました。エリシャが祈ると、しもべの目は開かれ、周りの丘を埋め尽くさんばかりの火の戦車と馬が見えました。

私はどのような火の戦車だったのか考えました。どのくらいの御使いがいたのでしょうか。

「主の使いは主を恐れる者の回りに陣を張り、彼らを助け出される。」とダビデは詩篇に綴っています。「主は御民を…囲まれる。」とエルサレムに上るユダヤの巡礼者たちは宣言しています（詩篇125:2）。ヘブル書の著者は、「御使いはみな、仕える霊であって、救いの相続者となる人々に仕えるため遣わされたものではありませんか。」と応答しています。

御使いに囲まれ、丘は火の戦車と馬に溢れ、主の使いは私の回りに陣を張り、御使いたちは仕えるために遣わされるのです。

私たちとともにいる者は、彼らとともにいる者よりも多いのです。自信を持ちましょう。

朝鮮半島の状況

マンスック・ソン

北朝鮮に対する国連の経済制裁により、同国は軍事的脅威をもって、米国や韓国の注意を引こうとしています。北朝鮮は中国、その他の国からの投資を失いつつある一方、韓国はますます海外からの投資を増やしています。韓国の株式市場は動揺も全くなく安定しています。北朝鮮から何らかの軍事攻撃があった場合、両国に対する関係が深刻なものとなるでしょう。

クリスチャンを迫害し続け、世界中に恐れと不安を引き起こす、北朝鮮における邪悪な政権が平和

的に終焉を迎えるよう、祈って行きましょう。

シャヴオット(七週の祭り)

五旬節の前夜(シャヴオット)の徹夜祈禱&断食のイベントを、あなたのカレンダーに書き込んで下さい。5月14/15日の夜10時~朝10時の12時間、イスラエル国内のコングリゲーションや祈りの家が、私たちと共に、心をつにして(使徒1:14)参加します。終わりの時にある世界的なリバイバルの約束が成就するよう(使徒2:17)執り成していきます。世界中の祈禱グループもインターネットとライブストリームを通じて参加します。賛美セット、祈りの課題、インターネットアクセス先は、来たる数週間の内にお送りします。どうぞこの「未来を見据えて歴史を刻む」イベントにご参加ください。

オルティツの動画

2008年にメシアニックジュー、オルティツ家の居宅を爆破し、その息子アミエルに重傷を負わせたユダヤ人テロリスト、ジャック・テイテルが、今週二重の終身刑を宣告されました。父親、ダビド・オルティツが映っているマオツ(ミニストーリー)の動画は[こちら](#)を参照の事。

2013年アウシュビッツ

ベラ・ダビドフ

ポーランドへ初めて行って、帰国したところです。アウシュビッツ-ビルケナウを訪れました。私は1947年にドイツの難民キャンプで生まれました。両親は、ホロコーストの生き残りで、彼らの親族の殆どや全てを失ったのです。唯一父の兄弟の一人はイスラエルに30年代に来たので助かりました。

私の両親は共にポーランド人でした。母はワルシャワのユダヤ地区で生まれ、育ちました。ドイツがポーランドに侵攻した際に、それをゲットーとしてしまいました。母はそこからの脱出に成功しロシアへ行きました。凍てつく寒さ、飢え、住む場所や着る物も満足にないといった、数々の困難にも関わらず、様々な場所を転々とし、生き存えたのです。戦争が終わり彼女はワルシャワに帰ってきましたが、生まれ育った町並みを含め、全て破壊されていました。瓦礫の中に何か自分に関連する物がなにかと探しましたが、何も見つかりませんでした。彼女以外だれも生き残っていなかったのです(母は1998年に85歳で亡くなりました)。

1948年イスラエルが建国されたとき、私は1歳で家族でイスラエルに移民してきました。なので、私はイスラエルとともに育ってきたのです。人生を通じてホロコーストで起こった事は聞いていましたが、

私がイエシュア(イエス様)にある信者となり、信仰の成長があって初めて、わが民族が遭遇した、信じられない程の惨劇について理解したいという欲求が出てきました。今こそ自分のルーツを辿る時だと思いました、娘のリアットが同行してくれました。

アウシュビッツに着いた日は、異常に寒い春の日でした。私は雪の上を歩き、ポーランド人ガイドによる、「非収容者」(おもにユダヤ人)が列車にてこの地に連れて来られたという説明を聞いていました。非収容者は到着と同時に性別により分けられ、貴重品を供出し、ガス室に入る前に衣服を脱ぐよう指示されました。立って聴いていて震えが止まりませんでした。寒さだけによるものではありませんでした。その死のキャンプに立ち、その場所の広大さを見るにつけ、「ユダヤ人を殺すために、ナチスがどれほどの距離を行軍し、ユダヤ人を収容するため、これほど多くの建物が建てられたのは、驚く程です。なんと莫大な投資でしょうか。」と感じました。

今日世界中から多くの人がアウシュビッツを訪れます。死んだユダヤ人の数 600 万人と聞きますが、それほどの大きな人数は実感がわきませんが、それらの人の膨大な量の毛髪、靴、歯ブラシやメガネは、どれくらいの人が亡くなったのかという1つのヒントにはなります。メガネの山を見た時には、これらは単にメガネであるだけでなく、1つ1つがその持ち主である殺されたユダヤ人を表しているのだという事に衝撃を憶えました。

私は、これらのこと全ては虚しく終わらないようにと神に叫び祈りました。ホロコーストの灰の中から主は、主の民を約束の地に戻されました。今主は、私たちを主御自身の元に戻されようとしておられます。私はパウロに祈りにあわせ「私が心の望みとし、また彼らのために神に願い求めているのは、彼らの救われることです。」(ローマ 10:1)